

2020年4月5日 礼拝説教要旨

詩編講解説教10 「主よ、立ち上がってください」

詩編10：12～18、マルコ14：40～42

今日は詩編第10編から特に12節以下に注目します。前回も申しましたが、この10編は9編から続く詩でありまして、ここには括弧して「アルファベットによる詩」とあります。それは各節の冒頭の言葉の頭文字がヘブライ語のアルファベットの順番で構成されるというもので、いわば「いろは歌」のような言葉遊びがここにあります。こういった形式というのは、一つに教育的な意図があると言われていています。アルファベットを用いることで憶えやすくし、暗唱するのです。それは、それだけここに神の民イスラエルの信仰の基本となる事柄があると理解してよいと思います。加えて、このような形式はバビロニア捕囚期以後のものと言われます。今日読んだところにも「主の地から異邦の民は消え去るでしょう」（16節）ここに「異邦の民」とありますが、バビロニア捕囚というのは、「主の地」神さまの約束の地に異邦の民が侵略して国を奪うという出来事だった。それは単に国家が滅ぶというよりも、彼らにとっては信仰の危機であり、礼拝の危機だったわけです。イスラエルにとって「異邦」というのは同時に「異教」でもあります。そこで信仰が奪われ、礼拝の場が奪われ、イスラエルのアイデンティティーが失われていくわけです。その後、捕囚が終わり、帰還した民はまず神殿を再建し礼拝を再開していきました。この詩編はそういう信仰を奪われる危機、苦悩の中でもう一度信仰を復興する、礼拝を回復することを求める、そういう意味合いが込められていると申し上げてよいでしょう。

先日、ある方からお便りをいただきました。そこにこう書いてありました。「皆様ご無事でいらっしやいますか。新型コロナウイルスによりそれまでの生活が一変してしまいました。感染予防のために様々な営みが停止を余儀なくされ、個人も組織も暮らしが脅かされ不安に支配されています。私もその一人で、主の受難と復活を覚える時を迎えようとしていても、心を備えることができないでいます」今日から受難週、来週はイースターです。でもなかなか心備えることができない。わたしも同じです。改めて今は信仰の危機だとも言えます。そしてまた礼拝の危機でもある。今、牧師たちとメールのやり取りをしながら情報交換をしていますが、ある牧師は「祈祷会など集会がなくなって楽になったかと言えば全く逆だ。正直しんどい」わたしも同感です。そのしんどさというのは、単に病気の怖さだけではなく、その病いに見え隠れしている人間の罪の問題です。先月の「長老会だより」にも書きましたが、病いが人間の罪を露呈していく。差別や偏見、疑心暗鬼があります。最近病いと権力が密接に繋がっているのを感じます。先週、新聞にある大学教授の「疫病と権力」についてのインタビューが載っていましたが、非常に共感する内容です。例えば、この熊本はハンセン病の療養所があって、かつて「らい予防法」という法律のもとに隔離政策がなされた。国家権力による病いの制圧。でもその中で人間も国家によって管理統制されていきました。差別、偏見が起きました。非常に生きづらい、息苦しい社会になっていきます。ご存知の黒髪小事件もそういう背景の中で起こるべくして起こった差別事件でありました。未感染の児童の就学に対して反対運動が起こる。とても悲しい出来事です。

今、牧師たちが危惧しているのは、緊急事態宣言のことです。もし国家による統制が行われ、わたしたちの礼拝の自由、信教の自由が制限されることになったなら、わたしたちはどう行動すべきなのか。自粛要請だけでもピリピリしている。テレビではアメリカの教会の牧師がインタビューを受けておりました。すると後ろから「教会を封鎖しろ」と罵声を浴びせられていま

した。教会は今そういう状況です。万が一感染者が出れば、世間からは格好の批判的でしょう。「そんな礼拝やめればいい」と全く信仰のことがわからない人は言うでしょう。でも簡単に「はい、やめます」と言えない。それはこの礼拝の主催者はわたしたちではない。教会の頭であられるキリストがわたしたちを招いておられる。しかも十字架でわたしたちの罪を贖ってくださったことで、わたしたちは御前に礼拝を献げることを許されたのです。キリストの命の招きの中でこの礼拝は成り立つ。それを簡単に国にやめなさいと言われて「はい、やめます」と言えるでしょうか。しかし世の中ではそのような信仰は全く通用しないのです。そこで多くの牧師たちは悩んでいます。そしてこの自粛要請のピリピリした空気の中で、またこの病いの怖さ、不安もあり礼拝の中止という苦渋の決断をした教会もあります。これは単純な問題ではない。非常にデリケートな問題です。まさに信仰の危機、礼拝の危機、わたしたち信仰者のアイデンティティーの危機であります。

でも、そのように悩むわたしたちにとって、今日の御言葉は慰めになります。「あなたは必ず御覧になって、御手に労苦と悩みをゆだねる人を顧みてくださいます」（14節）神さまがわたしたちのこの悩みをご覧になっておられる。たとえ礼拝を中止せざるを得なくなっても、その痛みや苦しみを神さまはしっかりと御手に受け止めてくださる。ここには「見る」という意味の言葉が二回繰り返されます。手にとってまじまじと見るというような言葉です。凝視する。それは神さまがわたしたちの悩みや苦しみを他人事とされず、我がこととして受け止めておられるということに他なりません。そしてこの神さまの顧みの出来事はイエス・キリストによってはっきりと示されました。悩みや苦しみを御手に取って我がこととされる。それがまさにキリストの受肉であり、受難の出来事であります。わたしたちの罪の痛み、苦しみを十字架で負われた。それゆえに「御手に労苦と悩みをゆだねる人を顧みてくださいます」とあります。わたしたちは今の苦しみをキリストにおまかせすることができるのです。

神さまは腕をこまねいて眺めておられるのではない。そのようにわたしたちを苦しめる罪に対して立ち上がり、毅然と向かって行かれます。今日はゲッセマネの祈りのところを読みました。弟子たちは眠りこけている。そこにわたしたちの貧しさ、弱さがあります。でもだからこそ主は立ち上がって十字架に向かわれました。今日の「立ち上がってください、主よ」（12節）この詩人の祈りはキリストによって聞かれました。毅然と罪に立ち向かい、これに勝利されるキリスト。わたしたちはこのキリストの御手に全てをゆだねるのです。そこに救いがある。わたしの強さではなくキリストの強さにゆだねること。そのようにして教会はこれまでの歴史の中でも幾多の困難を乗り越えてきたのではないのでしょうか。

ある牧師が、今の状況は戦争の時とよく似ていると言われたそうです。考えてみれば、戦争の時代、当時は松木牧師の時代ですが、それこそ礼拝の危機がありました。会堂敷地を強制的に立ち退かされ、転々と礼拝の場所を移しては、でも礼拝を守った。ある時は出席5名とあります。これは松木先生の家族だけだったのかもしれませんが。貧しさがあります。でもそこで希望をつないだ。その貧しい者たちの祈りが教会を代表する祈りとなり、御前に全ての者たちの祈りを届けたのです。その貧しい祈りをキリストが御手に取って受け止めてくださるのです。主に全てをゆだねましょう。